

白球物語

全国高校野球京都・滋賀大会

校名入りのチームバッグを抱えた球児が次々と扉を開けた。スポーツ障害を専門に治療する「丸太町リハビリテーションクリニック」(京都市中京区)。2年前に設立された同施設では、さまざまな競技の選手がリハビリに励んでいる。

小学生からプロまで一日に70〜80人が訪れ、6割が野球選手という。目前に迫る夏の大会で復帰を目指す高校球児も多い。理学療法士の松井知之さん(40)は「みんな夏に勝負を懸けている。何とかグラウンドに立たせてあげたい」と語る。

③ 治療と予防

早期診断 球児の夏守る

野球選手を肩や肘のけがからどう守るか。京都で転機と化したのは2008年。京都府高野連と医師や理学療法士らが連携する「医科学サポ



球児の回復具合を丹念に調べる理学療法士の松井さん(京都市中京区・丸太町リハビリテーションクリニック)

公式戦の試合後や府内全校が参加する講習会の際、超音波診断などでけがを見つけ、早期の治療につなげている。取り組みの中心である京都府立医大の森原徹任准教授(49)は「選手と高齢者とは時間軸が違う。大会で全力が出せるように、逆算してリハビリを進めなければならぬ」と言う。

丸太町リハビリテーションクリニックからは多くの球児が故障から復活を果たした。北稜(京都市左京区)のエースで船楓亮太主将(3年)は肘の治療のため昨年通院した。「治療を通して下半身の柔軟性も上がり、バランスの良い投球ができるようになった」と感謝する。同高の手島

健守監督(55)も「選手は痛くても無理をしがち。指導者が気づいてあげることが大切」と話す。今春の選抜大会では延長十の森原徹任准教授(49)は五回引き分け再試合が2試合も続いた。球児の健康管理について注目が高まり、来春の甲子園ではタイブレークが導入される見通しになった。松井さんらは「回復には早めの発見こそ重要。故障の予防も進めたい」と強調する。現在、選手が故障を未然に防げるよう、前兆を見極める指標作りに取り組んでいる。「僕らが診る人数には限界がある。選手がセルフチェックできるようにしたい」。グラウンドの外で医療スタッフも戦

(山下悟)